

平成十七年九月一日発行 第十六巻第九号 通巻第一七二号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

岡井省二創刊

平成17年9月号



更衣

高橋将夫

甚平を着てそれからの余裕かな
羅を着て胸元のゆとりかな
青山椒これだけあれば十分よ
ここまではとどかぬ草矢なりしかな

金泥のごときまどろみ釣忍
さつきまでなら斑猫はつかまらず
上りより下り優先雲の峰
もう少し振らねば夜振火とは言へず
夏霧を吸ひ人間のままでゐる
花氷人に見られて解けにけり
ためらはず心もろとも更衣

柔らかい羽根

片岡静子

キ
ャ
プ
テ
ン
の
バ
ツ
ヂ
を
着
け
し
鳥
の
子
き
を
つ
け
お
ね
が
い
し
ま
す
夏
始
む
ル
ー
ル
ま
だ
よ
く
わ
か
ら
ず
に
大
暑
か
な
強
い
羽
根
柔
ら
か
い
羽
根
夏
に
入
る
ラ
ケ
ッ
ト
の
握
り
癖
あ
り
夏
つ
ば
め
空
ら
振
り
も
思
い
切
り
な
り
汗
の
玉
父
と
子
の
羽
根
打
ち
続
く
夏
至
の
朝
時
々
は
倒
立
も
す
る
山
の
蟻
な
に
は
さ
て
集
つ
て
来
る
海
月
か
な
尺
蠖
に
な
っ
て
柔
軟
体
操
す

特別作品

臨月の腹の中にも青田風
破水から長き一日植田かな
父の日の夕方であり初出産
さくらんぼ初湯は使わないままに
足の指手の指長し合歡の花
初めての乳を含みし花石榴
青蛙豆腐屋の子に生まれけり
似てゐると四方八方栗の花
命名の清明神社早桃かな
眠る息泣く息のあり青葡萄

槐安集

市場基巳

きのふけふ蒨蓮草に黄砂つむ
青芭蕉あさつてあたり素面にて
気づかひし空に日が出て躑躅見る
花のいろに驚くことも子供の日
初夏の水筒かはりあひて飲む

水野恒彦

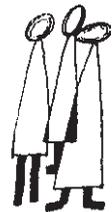
人間と生まれて笑ふ浮いてこい
無量無辺不可思議暮の鳴く
黒揚羽くらくら天の乾くとき
纏足の痛さのいろに夕焼くる
青無花果天衣ほど透くものを着て

石脇みはる

飛鳥の蘇食して水無月過ぎにけり
むこう脛丸出しにして松の花
住吉のつはぶきむらに夏兆す
出目金のすくひこぼれし一尾にて
きげんよき一ト日を過す蜥蜴かな

竹内悦子

方舟や菩提樹の花まつ盛り
三室戸の牛と目の合ふ蓮浮葉
明易の和紙にいかすみかりんとう
赤海蛸ほやや賽の河原にゐたりけり
滴りやあかえぞまつに天狗住む



延 広 禎 一

白毫に蔀明りや夏の鹿
のど飴や仁王の口と子燕と
喜雨の中鬼門に大黒瓦かな
雲閑や月山筍の肌赤き
桐下駄の禿^ちびり玉解く芭蕉かな

中 島 陽 華

厨子王を呼ぶは襖ぞ鳴鳴けり
師の墓に白桃ひとつ供へけり
山法師咲くや赤色鞆持ち
振舞は鯨汁なり大袂
神歌の聞えて来たり額の花

栗 栖 恵 通 子

水無月の人を吊して大きな木
夏かすみ卵黄箸でつまみをる
夕牡丹鬼の匂ひとすれ違ふ
護摩壇にはんざき色の闇が来る
三角に墳盛る遊び夏銀河

加 藤 み き

母がりやすでに葭戸になつてゐし
棕櫚の花倭建命かな
砂の上の浅沓の音夏の空
悼塚本邦雄先生二句
シチリアの白き石段雲の峰
水無月のもつとも似合ふ漢なり

大島翠木

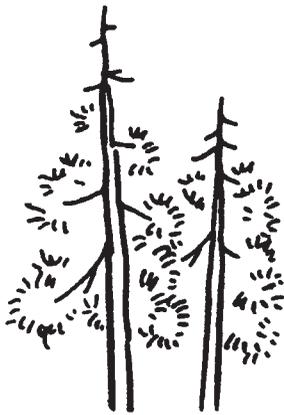
澎湃と法然の立つ青葉闇
しがらみを誘ひて恋の螢見に
ほうたるや昏くてならぬ北斗の柄
赤棟蛇やまかがし常磐木ばかり杜なせり
ばつてらやにはかに暮れて大江山

雨村敏子

いつきても滝を見にゆく山の空
石に色ぬつてゐたりし花むぐり
青貝の息をしてをる五月闇
石首魚の真子をとり出し寿限無かな
螢や池の真中に翳りある

黒田咲子

国分寺や築地に沿ひて溝浚へ
水神の緋鯉移されへド口抜く
山水の景より出づる赤蛙
緑蔭に入るべく潜水橋わたる
どうしても口にのこれる骨どちやう



槐市集

竹中一花

玄室のまはり緋色の夏の花
狐坂越え暗闇の梅雨烟
青落葉流れし川に犬洗ふ
菩提樹の花の真下に坐りをり
雲龍を呼びし護摩火や青嵐

谷村幸子

夏葱を土ごと包む新聞紙
初ひぐらしみかえり阿弥陀ま近にて
東雲の南瓜の花に受粉せり
七半を停めし青年花蜜柑
八坂の塔見ゆる家並や梅雨に入る

谷岡尚美

七宝のごとく一山額の花
水無月や瑞穂の国の水匂ふ
鉄線花母の筆筭に古代裂
花檣に淡^{あわ}淡^{あわ}出会ふ瀬音かな
母子像の頂似てゐし木下闇

寺田すず江

人知れず踏まれてをりぬ桜の実
夏菜莢の熟れてをりけり絵曼荼羅
郭公の声みづうみを走りけり
泥眼や天水に浮く未草
かはらけのすぐそこに落つ夏木立



槐集

高橋将夫選

半夏生草魂の通りしあととなりき
枚方

中野京子

メルヘンでなかつた山の青い芥子
同崎

本多俊子

ひとよ茸の形のランプ夏の湖
億年の琥珀の眠りはたた神
結願の蚕の上蔭^{あがり}山の晴

近藤喜子

即是空大きな糞を夏の象
花槐星の渦より出で来たる
命宮や蛆矧の糞を耕しぬ
安城

天野きく江

口あけし金魚よきこと囁きぬ
かきつばた中性的でありにけり
ポセイドン積乱雲を呼びにけり
道をしへ神の従僕なりしかな
椎匂ふ杜にて神の憩ひたる
十葉や星なき夜の星の道

岩月優美子

マントラや煮つめきつたる花山椒
初夏や赤糸緘大鎧
奈良

瀬川公馨

浜昼顔アフロディーテの足跡か
踊るサテュロス夏の深海思ひをり
白南風や波音乾きはじめたり

ひなげしの裏も表も売りに出す

銀河往来 高橋将夫

(前略)

「槐集」観照

半夏生草魂の通りしあととなりき 中野 京子
半夏草に一種の臭気があり、葉の反面が白くなっている。緑の葉に白い葉が混じっている情景を見て、魂が通ったようだという作者の感性に打たれる。

ポセイドン積乱雲を呼びにけり 近藤 喜子
雄大な海と入道雲。ポセイドンはギリシャ神話の海の主神。大地・泉・地震の神ともいう。ポセイドンが入道雲を呼んだとみた感性に脱帽。神話と気象学の融合。

椎 匂ふ社にて神憩ひたる 岩月優美子
椎はブナ科の常緑高木。香の強い小さな花をつける。椎の大木の木陰は神々が憩つにふさわしい場所だと納得させられる。

メルヘンでなかつた山の青い芥子 本多 俊子
芥子の花は白か赤色系。青い芥子となると、なるほど、もはやメルヘンなどと言っておれない世界に入る。

千の人萬のあぢさい微塵かな 天野きく江
千の人がいて、萬の紫陽花がある。カメラを大きく引いていくと、それら一切は宇宙の中の微塵。

マントラや煮つめきつたる花山椒 瀬川 公馨
マントラは真言。このマントラと花山椒の配合を感受したけれ

ば、煮つめきつた花山椒をじつくり味わってみるべし。

蛇塚の夏の暗さに慣れてきし 竹中 一花
蛇塚のこの暗さに慣れてしまったからには、もはやここを抜けることはできないであろう。

ゴッホの耳 芳一の耳 飽食む 中田 禎子
ゴッホの耳と耳なし芳一の耳。いづれも曰くのある耳。飽を食む思いがある。

水無月の色となりたる楓の道 谷村 幸子
水無月の色はどんなか、いろいろと想像が広がる。さすがしい情趣なのだろう。「楓の道」からして、きつとそうだと思う。

金剛鈴の遠ざかりゆく夏野 近藤きくえ
生気にあふれた夏野と、遠ざかってゆく金剛鈴。まさに精神の風景。こころの彩。

螢のまるい穴より出でにけり 植木 戴子
あたりまえの不思議。螢が出てくる丸い穴。思い浮かべるだけで、かるやかになってくる。

犬の尾にからまつてをる栗の花 近藤 紀子
これまた、何の品も作って無い作品。素朴な栗の花が実に素朴に効いている。

山彦の変らぬ若さ山葵掘る 久保東海司
筈に変らぬ若さを感じるには誠にユニーク。「山葵掘る」が全体の景を実に鮮明にしている。